

人と人が同じ場所にいる、ただそれだけのことの難しさをこれまで想像してきただろうか。この文章を書いている今、新しい感染症の流行が日に日に世界中に拡がり、治療法が確立されるまでの当面の戦略として、社会的距離 (Social distancing) を保つことの有効性が強く意識されている。

この困難は、ひょっとしたらこの世界が既に (過去の疫病の流行時や、戦時中などに) 経験済みの種類のものかもしれない。それでも「多くの人が集まる」ことを数値評価する価値観が当然に広がった社会で、「一緒にいられない」ことは重大なインパクトを持って現前しているのだ。

この困難の実感が世界的に広がる少し前、2020年2月1日の京都芸術センターでは、前田耕平の「Love Noise」プロジェクトの参加型パフォーマンスイベントに、100人を超える人が一同に集っていた。「愛の声を採集し、その形を探るプロジェクト」と銘打たれたプロジェクトだ。

「愛」という抽象的なテーマ、かつ大上段な呼びかけにもかかわらず、それだけの人が集まったのは前田の粘り強い勧誘 (?) による。彼は、センターのエントランスに《Love ブース》を設置して、イベントまでの1ヶ月間ひたすら毎日、来館者ひとりひとりに向かって「愛」についての議論をふっかけ、参加者を募った。かくいう私も参加をふっかけられた一人である。

このパフォーマンスでは、まず参加者達にカードとペンが配られて、自分が「愛を感じたこと、または愛だと思ふこと」をしばらくの間思案し、各々、記述した。近くに座る人の目線や手元をちらちらと意識しながら、沈黙が流れ、居合わせた人々がともに神妙な顔をして「愛」について回想をめぐらせる。不意に妙な時空に入りこんでしまったかのようで、少し可笑しくもあった。

カードに書きつける言葉や体験を、なんとか絞り出した後は、簡単なボディアワークで心身のこわばりを解してから、全員で発声するパフォーマンスを2回実施した。今書いたことをイメージしながら自由に発声してください (言葉は使わずに)、という難しいオーダーだった。参加者たちは、アウトプットしたばかりのそれを抽象化し、さらに具現化する声を出そうと、個々に挑戦した。

歌うように音階を変化させる人、「あー」だったり「おー」だったり一定の持続する声を出し続ける人、大きく声を張りあげる人もいれば、聞こえるかどうか分からないほど微かな声の人もいた。まさに三者三様である。リズムをとるように体を揺らしていたり、隅っこで小さくなっていたり、空を見上げていた

り、声だけでなく身体的所作も様々だ。私は、バラバラの調和に自分の声を合わせるよう、目を閉じて無数の声音・音階を聞いていた…。

このパフォーマンスへの参加時と、それを元に作られた映像作品《Love Noise》では、音響体験が大きく異なっている。当然ながら生音と再生音という差はあるが、それ以上にそれらの音響には違いを感じられる気がした。

パフォーマンスの際に5箇所を設置されたマイクで録音された音源は、映像インスタレーションでは、マイクの設置と同じ方向の5箇所に置かれたスピーカーからそれぞれ出力されているという。これは構造的には、ある一点（マイク）で空間に拡散する音を集音し、出力時は逆に、対応するある一点（スピーカー）から集音された音を空間に拡散していることになるだろう。それらの複数のスピーカーの間に立ち上がる音像は、さしずめステレオ写真に見る立体像のようなものというか、違和感をともなうボリュームの立体感を感じさせた。

騒音（Noise）を「認識」ということは、その音波が伝える情報に対して、受け手側が内的な「理解」をし損なっている状態にあり、さらにはその情報が受け手にとって無意味あるいは有害とみなされてしまうことだといえるだろう（愛の呼び声も虚しく！）。

そう考えれば、二つの音像はともに人々の声の集合体でありながら、再現（映像）では、すんなり（これこそが愛である、と）「理解」されることがあえて回避され、わからなさの宙吊りのままに置かれていたようにも思う。

それでも、パフォーマンスのその瞬間には、それが「愛」だかわからないが、多様性を内包した調和のようなものが何かしら立ち上がりかけていた、そのような実感もあるのだ。展示室でひとり（正確には監視のボランティアさんとふたり）、マッシブな音像によって、あの充実からの疎外を、あるいは「一緒にいられる」ことからの断絶を、意図されず突きつけられてしまったような気がした（この感触はあくまでも両方を体験したために感じられるものであって、映像作品のみを純粹に鑑賞すればまた別の印象が得られるだろう）。

人と人が同じ場所に共にいることは、何を可能にするのだろうか。そこでは、言葉によるコミュニケーションだけに限らず、声色、アイコンタクト、微細な表情や仕草、匂い、接触など、あらゆる種類の感覚的コミュニケーションが無意識的におこなわれている。

五感によって認知されえないレベルでのコミュニケーションもある。たとえ

ば複数の個体が互いに近くにいる時、条件がそろえば、脳波や心臓が発する電磁波などの生体信号が個体間でリンクするという生理学説もある。私たちは身体が共にあることで、潜在的に影響を与え合っているようなのだ。

そうはいつでも「共にいられない」時代の、この先の展開に悲観してばかりいるわけにはいかない（もちろん、終結をすぐそこに迎えるために今、共にいない選択をしている）。そもそも、音声や生体信号が止むその時には、人は必ず孤独である。どうあがこうと、一方ではそれが真理でもあるだろう。

その意味で、タオ・フィの《Hello, Finale!》は、人々の関係性の別の軸を示してくれている。

一人掛けソファとモニターが並ぶ、まるで視聴ブースのような展示室。モニターには何らかの「終わり」に直面するひとりの人のドラマが映る。登場人物はそれぞれ、電話の相手に語りかける。ひとりで迎える「終わり」を前に、複雑な心中を聞いてもらわずにはおられないかのような饒舌さだ。どの人にも、電話口の向こうに、その悲壮な語りを受け止めるひとりの相手がいる。それだけで、これらの「終わり」にも救いの光がさしているように思われるのだ。

遠隔通信の手段は、電話に限らず、情報伝達技術の発展とともにヴァリエーションを増やしている。狼煙や手旗のような原始的な信号から、高速通信に支えられたオンラインでの集合まで、私たちは利用できる環境にいる。こうした技術が、ひとりへの切断を一時的に越えることを可能にしてくれるだろう。

芸術についてもまた、時空を遠く離れた「誰か」（未来の鑑賞者）に向けられたテレコミュニケーションであることを思い出そう。本展は、こうした状況下で鑑賞されるために構想されてきたわけではない（特にタオの作品は、2年前の京都芸術センターでのレジデンシー・プログラムで制作されたものだ）。それにも関わらず、物事の不変の道理に通じようとする根源的な表現は、まさしく方程式のように、今の私たちのつながり方に対して多くの示唆を与えてくれる。

2種類の「つながりの方程式」は、この難しさにひとりひとりが解を出すための手立てとなりうるのではないだろうか。

はが みちこ（アートメディエーター）